

の行動履歴やアンケート回答から支援が必要な子どもや保育者を選定し、収集したメールアドレスに必要な情報を提供したり、支援者を紹介することが可能になる。こうした情報システムを平日常時から広く社会に普及させ、次に起こる大規模災害に備えることができれば、被災後の子どもの心のケアを支えるための情報システムとして活用することが期待できる。

G. 研究発表

学会発表

1. 善甫啓一, 北村光司, 西田佳史, 本村陽一, “ロボティック遊具ノボレオンを用いた地域イベント運営とその賑わいの解析・活性化”, Robomec 2014, 2014.
2. 村山敬裕, 廣川典昭, 吉田真, 本村陽一, “RF-IDカードとタブレットを用いた電子アンケート収集と分析によるイベント来場者のモデル化”, サービス学会第三回国内大会, 2015.
3. 本村陽一, “確率的潜在意味解析とベイジアンネットを統合した確率的潜在意味構造モデリング～サービス工学への応用～”, 文部科学省委託事業, 数学協働プログラム「確率的グラフィカルモデル」, 2015.

（研究代表者 五十嵐 隆）

分担研究報告書

こころのケアにおける文化的配慮に関する研究

研究分担者 舟橋 敬一（埼玉県立小児医療センター）

（要約）地域への文化的配慮が子どものこころのケアに関する支援を受け入れやすくする重要な要素の一つと考え、海外から日本への支援者と地域で被災をうけながら支援を行っている者にこのテーマでインタビューを行った。

地域には、利他の精神といえる個人よりコミュニティーを支えることを優先とする価値観があり、そのことによってコミュニティー全体が支えられ、その中で個人が支えられているという側面が考えられた。また、地域の祭りなどの行事はそのような仕組みが機能するために有用である可能性があった。しかし先の震災のように、そのコミュニティーのキャパシティを超える事態があった時、あるいは、その仕組みゆえに困難な状態になっている人には、外部の人間の支援が本質的に必要となることが示唆された。

1. 目的

被災体験により子どもはトラウマ反応を起しうるし、被災環境下では子ども虐待のリスクとして知られている様々な要因が悪化するなど、被災による環境の変化は子どものこころに影響を与えている。

災害の後、子どもに、こころの問題に関する症状があり、それに対するプログラムや治療などの支援があったとしても、必ずしも、そこにスムーズにつながるとは限らない。対処可能な症状として見ることと、その先の相談を求める姿勢があって初めて支援につながるようになるのであろうが、実際にはその変化を症状とは見ていなかったり、気づいていても、社会的に排除されることを恐れて、支援を求めることをしなかったりするという話も聞かれる。そのような状況の中で、どうすれば必要な支援につなげることができるのかということを文化的配慮という視点から考えていきたい。

2. 方法

被災後早期に地域内の支援に携わってきた 6 名と海外から日本へという立場で支援を行った 1 名に対して、文化的配慮と言うキーワードでインタビューを行い、テーマを抽出したうえで考察を加えた。

- ・秋山信行：カフェレストラン エルコリーヌ シェフ
- ・伊茂野達哉：久慈市立侍浜中学校 校長
- ・宇部たみこ：もぐらんぴあ・まちなか水族館 専務取締役
- ・小関高博：岩手県教職員組合九戸支部 九戸教育会館事務局 書記長
- ・坂本久美子：苫屋 女将
- ・関本満：野田村野球協会 会長
- ・Manoj Kumar Dewan：Delhi Dhaba, president

2. 結果

【世話役の力】

地域の仮設住宅の世話役からは、支援に入れなかった団体に対して「ひとこと言ってくればいいのに、勝手なことす

るから・・・」と。地域の人にとっては、「小さい時からずっとお世話になってきている。行事でも、なんでも。」という事で、その信頼と指導力は一朝一夕にできたわけではない。津波被災後、速やかに美容院を再建した夫婦にその当時の原動力を聞くと「〇〇のじいちゃんがやってるから、こっちもやらないわけにはいかなかった。」との答えが返ってきた。また、支援物資の下着のサイズが合わない避難所で収拾がつかなくなっているときに、世話役の「こんな非常事態の時なんだから、体の方を合わせろ！」の一喝で場が収まったという話も聞いている。

もちろん、東日本大震災で地域のシステムを全く失ってしまったようなところでは外部の者が一時的なまとまりを作る必要があったのも事実である。

【祭り】

野田村では被災したその年から秋祭りを催した。出発点は「祭りがないと年が越せない。」という思いであった。祭りは時を刻む。もちろん祝い事という側面があることや、予算が取れないことなどから反対意見も多かったという。しかし、終わってみると、地域の人協力の場できて、復興のための作業の場ができた。外部にとってわかりやすい支援の受け皿ともなったおかげで、秋祭りは実現した。この時に興味深い話があった。被災後、表情乏しく、活気なく暮らしていて、周りが心配していた、80を超える女性が、その祭りの場で突然、茄子を持って踊りだした。特にそこに伝わる踊りというわけでもなく、その女性の、その場での表現であった。その踊りの後、女性は久しぶりに晴れやかな顔を取り戻したという。「ばあちゃんの茄子踊り」と今も語

られているのだそうだ。祭りは儀式と解放のセットであり、この女性に解放という回復の場を与えたのだろう。

もちろん祝い事はできない、予算は取れないという理由で、自粛していた地域も少なくない。「3年後に亡くなった友人の弔いをして、ようやく祭りの再開にこぎつけることができた。」という話もあった。

【海と生きる覚悟（選べないことの強さ）】

「俺には海があるから大丈夫。何があっても生きていけるよ。」とは、被災間もない避難所での世話役の言葉。「海と生きる覚悟」という言葉を沿岸部のいくつかの地域で聞いた。新たな日常を作っていく方向に迷いがなく、この覚悟がある種の強さを与えているように感じる。

「ここ（沿岸部）の子で海を怖がっている子はいないけど、内陸に行った子はまだまだ。久しぶりに遊びに来たのでクラゲ取りに連れて行ったら海岸線を走るときに車のこっち側にびったりついて海から離れている。・・・無理はさせなかったけど、こっちで楽しそうに遊んでいるとその子もやってきて、一目見るなり『きれー！』って。帰りはもう大丈夫だった。ここは海がきれいだから良かったよ。」というエピソードを聞いた。恐れを抱き続けている子どもがいることを否定するものではないが、通常のリcovery過程に資する場を与えられていることもまた大切なことなのであろう。

【プライド】

困っているから支援を、と考えるが、本当に必要としているのは他人の役に立っている実感であったりプライドであったりすることだってある。仮設住宅に住

む男性が、様々な支援に関して、「ありがたかったですよ。」と言った後、「ただ、正直な気持ち、この辺の人たちは支援に来られても、来た人に何かしてあげなきゃって思うんですよね。わざわざ来て何を持って帰ってもらえるんだらうってことになる。」と付け加えられた。「うちらいい方で、わざわざ来ていただいて、むしろすみません。」とは何度も聞いた言葉である。臨時診療所の医師が帰った後に、「そんな偉い先生に（自分の）具合が悪いなんて言って、迷惑かけられない。」と、内輪で漏らしていたり、さらに、「そんな人が来る時のこっちの惨めさを考えてみる！」と怒りを示された方もいたと聞く。守られるより守る立場にいる方が気持ちは楽なのであろう。

今回の震災後、「女性はエステとかみんなが集まったりする場ができたけど、男性はプライドも取り戻せずにどんどん取り残されていく。だから、男性には働く場が必要だと思って作った。」という団体もあった。存在の意味がつながることであれば、コミュニケーションの場が必要になるし、存在の意味が役に立つことであれば、仕事の間が必要になるのであろう。

「支援を受けた方に感謝状を要求されました。私が仲介したので、その時にもちろんお礼はしたのですが、直接工房の人からの感謝状がほしいといわれて、開いた口が塞がらなかった。振り上げた手を下すのが精いっぱいでした。」という悲しい話も聞いている。お金がどのように使われたか報告の義務があるからかもしれないが、プライドという点では、全く逆方向の支援となっている。

【組織の論理は個の論理とは異なる】

「嫁いできて、食堂で、家族で食事を

してたら、地元の人に来て、屋号は？と聞かれるんですよ。」と驚かれた方がいる。最近はその嫌う人もいるが、屋号を大切にしている地域も少なくない。つまり、大切なのは名前というより役割である。個人としての存在もあるが、それ以前に地域での役割や家にとっての役割がある。個人的に支援の話が進んでも、全体としては話が進まないという例もある。地域での役割ネットワークとでも呼ぶものがすでにできていて、個人の力だけでは動かせないということらしい。

【死生観】

遠野物語には津波で妻を失った男が、亡くなった妻に会って、昔恋仲だった男と一緒に暮らしていると聞かされる話が載っている。また、「2階に（亡くなった）おばあちゃんに来てたよ。」と子どもが伝え、周りも「おばあちゃんと仲が良かったからね。」とそれを受け入れている話を聞いたのはこの被災2年後である。同様の話は被災後特によく聞かれたという。このように亡くなった後も生き続ける死生観は喪失に対して影響を与えるのではないだろうか。

【利他の精神】

個人と組織の論理が違うことでも取り上げたが、地域の（人々の）ために動くことが自然なのである。宮古の中学校で避難所の指揮を執っておられた校長先生が「自分は故郷の田老のために何にもしていない。」と苦しんでいる感覚が自然なのだ。「この震災を機にこっちに戻ってきたんですけど、やっぱり自分は本家で責任があるので。」という方も少なくない。「この辺は子どもたちも、自分より他人って考えるんですよね。」と地域での役割を果たすことを期待されて育

てられた価値観かもしれない。

【小さなことがストレスとなる】

津波という大きなアタックを乗り越えた方々の実際の負担となっているのが「ちょっとしたこと」や「小さなこと」という話をよく聞く。それは、「狭い家」であったり、「小さな冷蔵庫」であったり。「地震や津波ももちろん大変だったけど、この地域では男は出稼ぎに行っていて、たいてい広い家にお父さんなしで暮らしている。それが、狭い仮設で暗い顔した旦那の顔見て暮らしてるっていうことで滅入ってくる。」ということが、耐え難い環境の変化となる。

「建築関係の人が町に来て、危なかしくて子どもを外に出すことができない。だから子どもたちが太ってきた。また、居酒屋とかもガラが悪くなった。」このような不安が続いていることも、終わりが見えないと大きな負担となるのである。

支援に入っていたインド人男性は、「なんでお金がない時に、お酒を買って、毎日酒盛りしてるのかわからない。」と驚いていたが、これも説明を超えたものであろう。

【余所者の役割】

「手伝いましょうかって来られても、この馬の骨ともわからないのに、『はい、お願いします。』って言えますか？見世物じゃないぞって叫んで、夫に止められました。」と被災当時のことを振り返って語る人もいたが、日常感覚から当然のことだろう。内輪のシステムで解決すればそれに越したことはないのかもしれない。基本的に他所から来るものは、地域の社会的資源が不足した状態の時に支援に駆けつけ、不要になったら去っていく

という図を描くのが一般的であろう。しかし本質的に余所者が必要とされる役割もあるようだ。

「自宅が残った（被災が少なかった）ために、援助物資の分配から外されるなど学校を含めて地域で露骨な差別を受け、子どもは登校を渋るようになされた。でも、このような悩みは地域で話せるものではない。」といった話は、実は、少なくない。「通り一つ隔ただけで保証が全く違うし、農業による保証も、実際にお米作るより高額のお金をもらっているようなこともあって、それに対するやっかみもありました。そういう気持ちにさせられるのが一番つらいですね。」補助金で作った地域の分断は大きな負担となっていたようだ。

またちょっとした不満でも、「こんなこと地元では絶対に言えない。その日のうちに広がってしまう。」、「お義母さんにも、個人的なことは絶対に言えない。」と家族の中でさえ、話すべきことを慎重に選んでいる話も聞く。そのような状態であるから、身体の具合が悪いこと、特に精神的な問題はなかなか話することができない。「具合が悪くて、心療内科とかかかりたいんですけど、同じ町だと何を言われるかわからないんで、離れてって思うと、通うには遠くて、結局行くのが大変で・・・」と受診に至るまで、その後の大変さを教えていただいたことがあるが、ケアを受けるといことと、（ある意味）差別を受けることは切り離せないようだ。地元でやりづらくなるというのも尤もなことなので、地域から誤解をうけない支援枠を考える必要がある。このような中で中立を保てるということでは余所者の存在は本質的ではないだろうか。

先に述べた野田村の秋祭りで中心にな

った女性は、「この働きは自分が他所者だからできた。」という。そこに住んで20年になることを知っていたので驚くと、「身内が近くにいたら、迷惑がかかるからとてもできなかつた。」ということだった。つまり何かをなすことは身内を含んだ入り組んだ関係性の中で、何かを動かそうということなのだ。彼女は「村長さんも飲んで泣いてる日があった。」ということをつけ加えた。

【語らない文化】

沿岸部の支援に入っていたインド人の男性は、「なんで、ネガティブなことばかり話題にするのかわからない。たぶん、これは文化だと思うけど、僕たちはこんな時はポジティブな話をすることにしてから、避難所ではそうした。」と語る。「いやー、僕らまだましな方なんで、まだ、大変なところがあるっていうじゃないですか。」という言い方を何度か聞いた。東北はどちらかという困ったことを語らない文化かもしれないが、そのことが地域社会に何らかの力を与えているという可能性は否定できない。

もともと、アメリカ人でさえ9.11をいまだに語れない人がいることを、マウントサイナイ病院のロバート・柳沢氏は指摘している。

4. 考察

地域には、利他の精神といえる個人よりコミュニティを支えることを優先とする価値観があり、そのことによってコ

ミュニティー全体が支えられ、その中で個人が支えられているという側面が考えられた。そして、地域の祭りなどの行事はそのような仕組みが機能するために有用である可能性があった。しかし先の震災のように、そのコミュニティのキャパシティを超える事態があった時、あるいは、その仕組みゆえに困難な状態になっている人には、外部の人間の支援が本質的に必要となることが示唆された。

5. 結論

精神保健は個人の生物学的な問題のみと捉えることはできない。人が傷つくのは、社会との関係によって作られる意味によってであり、精神的負担を感じるのは失われた日常性とのギャップだからである。被災がどのような意味を持っているのか、何を失っているのか、ケアされることがどのような意味を持っているのか、その理解のないケアはあり得ない。もともと持っていた日常性に対して、良し悪しの評価をすることは無意味である。衣食住に始まるライフスタイルを新たに教えていただく態度が大切である。受け入れられる余所者であるためにはそこに居続けることが不可欠である。地域のシステムは基本的に人を支えているのであるが、一方で、排除する方向に向かうなど、そのシステムが負担になっている場合もあり、余所者でないといけない支援もある。だが、そのような場合でも余所者だけでは困難。つなぎ役が必要である。

4. Disaster Preparedness に関する研究

平成 26 年度 厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）
被災後の子どものこころの支援に関する研究

（研究代表者 五十嵐 隆）

分担研究報告書

子どもと家族への被災後の長期的ケアと次の災害に備える研究

研究分担者 奥山 眞紀子

研究要旨

被災後の子どものこころのケアにおいて、短期には PTSD 症状を中心としたトラウマ反応に対するケアが中心となるが、長期的には家族の問題や環境による逆境状態からくる複雑性トラウマ（発達性トラウマ）が問題となる。そこで、昨年は災害後支援の専門家を招いての国際シンポジウムを行ったが、今年度は発達性トラウマに関して、臨床と脳科学の両面からその第一人者である Bessel A van der Kolk 教授と Martin H. Teicher 教授、そして福井大学の友田明美教授により「発達性トラウマによる生物学的変化と治療」というセミナーを開催した。これまで東京以北でのみセミナー等が行われてきたため、杉山登志郎研究分担者のご配慮によって今回は祝日の夕方に名古屋で行い、180 名が参加した。その後、盛岡において八木淳子分担研究者のもとで同様のセミナーが開かれた。

また、これまでの研究班の知見を基に、今後の災害の子どものメンタルヘルスに関するリスクマネジメントの研修目的に東京において 2 日間にわたるシンポジウム&ワークショップを開催した。分担研究者が全員で関わり、その知識を伝えた。延べ 160 人が参加し好評であった。

更に、それを冊子として残すために、分担研究者全員で「子どものメンタルヘルスリスク軽減のための災害マネジメント」を編纂した。

内容は資料として添付する。



同時通訳付
申込不要
参加無料

発達性トラウマによる 生物学的変化と治療

2014年 9月16日(火) 18:00~20:45

会場: ホテルメトロポリタン盛岡 NEW WING
3階 星雲の間
岩手県盛岡市盛岡駅前北通2-27 JR盛岡駅より徒歩3分

プログラム

座長: 友田明美 福井大学 子どものこころの発達研究センター 教授
八木淳子 いわてこどもケアセンター 副センター長
岩手医科大学医学部神経精神科学講座 講師

子どもの発達性トラウマによる生物学的変化

マーティン H. タイチャー Martin H. Teicher
マサチューセッツ州マクリーン病院発達生物学的精神科学研究プログラム責任者
兼マクリーン病院マイルマン研究センター発達精神薬理学部門チーフ

子どもの発達性トラウマの治療

ベセル A. ヴァン・デア・コルク Bessel A van der Kolk
トラウマセンター・メディカル・ディレクター、ボストン大学メディカル・スクール精神医学科教授、元インターナショナル・トラウマ・ストレス学会会長

平成26年度厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)
被災後の子どもの心の支援に関する研究(研究代表者 五十嵐 隆)

お問い合わせ

独立行政法人 国立成育医療研究センター こころの診療部

E-mail kuwasawa-m@ncchd.go.jp

Fax 03-3416-0610

Open session,
free of charge

Simultaneous
translation
provided

International Seminar on Neurobiological Effect of Developmental Trauma and its Treatment in Children

Date: September 15, 2014 (Mon) 18:00-21:00

Venue: Nagoya Congress Center , Building 4, Shiratori Hall
1-1 Atsuta-nishimachi, Atsuta-ku, Nagoya-shi, Aichi-ken

PROGRAM

Neurobiological Effect of Developmental Trauma in Children

Martin H. Teicher M.D., Ph.D.

Director, Clinical Chronobiology Laboratory, McLean Hospital
Chief, Developmental Psychopharmacology Laboratory,
Mailman Laboratories for Psychiatric Research, McLean Hospital

Akemi Tomoda M.D., Ph.D.

Professor, Research Center for Child Mental Development
University of Fukui

Treatment of Developmental Trauma in Children

Bessel A. van der Kolk M.D.

Medical Director of Trauma Center,
Professor of Psychiatry, Boston University School of Medicine
Past President of International Society for Traumatic Stress Studies

2014 Health and Labour Sciences Research Grants
Research on Region Medicine, Study for Post-Disaster Child Mental Health Support

Contact
information

National Center of Child Health and Development,
Department of Psychosocial Medicine

Email: kuwasawa-m@ncchd.go.jp Fax: 03-3416-0610